

ナルト機神咆吼伝

ナガレール

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

少年は里の民より忌み嫌われ、一人の理解者が傷付いた

その時怒りと憎悪により九尾を解き放ち、里を壊滅へと誘う

誰もが絶望しかけたその時、鋼鉄の巨人により九尾は再び封印された

そして里のほとんどの民は気づく事はなかった

1人の幼い少年が姿を消したことに

その代わりなのか鋼鉄の巨人を喚ぶ言霊は、人々の心に刻み込まれた

時は流れ5年の後、赤髪の少年が木の葉の里へ……………

目次

第1話	転入だってばよ!	1
第2話	卒業試験だってばよ!	5
第3話	班を決めるってばよ?	11
第4話	演習鈴取り合戦	18
第5話	忍者登録とライバルだってばよ	25
第6話	2人と1匹の思うところ その1	29
第7話	任務開始だってばよ	32
アニメ最終回記念特別編	白き翼と瞳	37
第8話	第一段階木登りの行だってばよ	40
水面歩行の行と敗北だってばよ	43

第1話 転入だつてばよ!

この世に悪があるとすれば

それは人の心だ

誰が言ったのかは分からないが、ストレートの赤髪で青眼を持つ同年代と比べて背が低い少年、風波アシユラは何となくその言葉を呟いた

「ええ今日は転入生を紹介する。さあ入ってくるんだ」

ここは木の葉の里・忍者学校の教室である

アシユラは1週間前にこの里に移住をした

親はいるにはいるが様々な世界で、とある神と戦いを繰り広げているため、安住できるだろうこの里に来たのだ

そして今日忍者学校へと入学することになった

試験を受けある程度の能力があると認められ、このクラスへと編入されることになった

「風波アシユラだつてばよ、よろしく!」

自己紹介も終わり、席に着く

(何だこいつ、何か変だ。わかんねえけど何か変だぜ)

(この人……初めてじゃない気がする……どこかで……)

少年と少女からの視線にも気付かずに……

アシユラの評価

座学の授業中の居眠り8割以上、歴史の授業に至っては10割が居眠り

体術まあまあで、相手に悪態をつくなど態度は最悪だが対立と和解の印はきつちりこなす

忍術、分身がまともできない、そのくせ風遁らしき術を使用、変化が得意

試験中も居眠り、白紙0点なので追試と補習を受けさせるも、赤点ギリギリで、補習中はマジメに受講する

時折4代目殉職時の事を、まるで見たかのように話すも、誰にも相

手にされず

成績はドベ、何故中途に編入されたのかわからない

時は流れアシユラ12歳のある夜

『ナル「その名前で呼ぶな九喇嘛」すまん』

『散歩に行きたいんだがなあ』

『ああ行つて来いってばよ』

『今日はもしかしたら長引くかもしれん』

『わかった』

『じゃあ行つてくる、そうだ断鎖術式は完成しそうか?』

『まだだつてばよ、風遁じゃ限界がある、重力を操る術が使えりやなあ』

『知り合いのチャクラが借りられれば、何とかなるかも知れんが、行方がわからん。クソダヌキの居場所しかわからんからなあ。』

まあせいぜい悩め』

「ああ」

という会話の後アシユラの本来の姿を借りた九喇嘛は里の外へと赴く。

里の外にはかつて、アシユラの両親が長い長い輪廻の果てに倒した男がいた

金色の髪に金の邪眼、聖書に記されし……

『今更何のようだ獣』

『初めましてだな、九尾の狐よ』

『何の用だと聞いている』

『あの時の子供がどうしているのかと思つてな』

『【あの2人】と【両親】のように正しく成長している

ただ、里への恨み憎しみは残っているがな』

『そうか、では【あの2人】に会うことがあれば、よろしく伝えて貰おうか』

『絶対悪が丸くなったものだ』

『それは貴公も同じであろう』

「マスター・・・・・・・・」

「時間か」

「はい」

いつの間にかいた少女は、男に時間が来たことを伝えた
見た目は12歳くらいの少女、黒を基調とした服装である
「では行くでしょうか、そうそう。」

数年の内に千の暗き闇が本格的に動き出す、気をつける事だ

「

そう言うと時空の狭間へと、2人は消えていった

『・・・・・・・・』

翌日 火影執務室にて

「何!?それは本当か!カカシ!」

「はい、成長していましたが確かにあの子でした」

「それで今はどこにおる!」

「わかりません、その男と女が消えた後・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・そうか」

カカシから報告をうけた三代目は長い沈黙のあと、一言だけ呟いた
そしてもう一つの報告を受ける

「それと風波アシユラですが」

「何か掴めたか?」

「3年前からその姿を各地で目撃されるようになってました」

「どういう事だカカシよ」

「わかりません、出身地や幼少期の情報、両親も不明でした」

「やはり危険分子なのだろうか・・・・・・・・」

「できれば違ってほしいんですがね、先生によく似た顔立ち、そして奥
方に似たあの髪・・・・・・・・」

「しかしなカカシ、日向からの情報では、あ奴は特殊な術で姿を変えて
いる可能性が捨てきれんのだ」

「わかっています、この目で俺も確認しましたから」

「なら良い、他にはあるか?」

「別件という訳ではありませんが、砂隠れで九尾らしきものと、砂の守鶴が戦闘していたという噂が風の国であつたくらいですね。」

真偽の程は分かりかねますが……」

「アカデミー卒業まであと数ヶ月、それまでに情報拮め、それがお前に与える今後の任務だ。」

決定的な情報が無い場合は、今年も頼むとするかの」

カカシは内心で頭を抱えた、また下忍の担当になれという火影の命令に……

こうも思った、どうせ今年も忍者になる資格もないクソガキなんだろうなど

風波アシユラ、里にいる中で木の葉最高の忍びを持ってしてもその詳細は不明である

続く

第2話 卒業試験だつてばよ!

卒業試験2日前の夜

「調子はどうかしら? アシユラ」

誰もいない場所から突然声がした、その場所にはアシユラが母より譲り受けた書物があるだけなのだが……

「なんだミコか、魔力は大丈夫なのか?」

「ええ、と言つてもあまり長時間はいられない」

朱い髪と青いの瞳を持ち、黄色を基調とした服装の少女がそこにいた、名はミコ

死霊秘法と呼ばれる魔導書、その写本の精霊である

『アシユラお前がさつさと契約して、チャクラなり魔力なり供給してやればいいだろうが』

「無茶言うなつてばよ九喇嘛、この変化の術でどれだけチャクラと魔力使つてると思つてんだ」

「いいのよ九喇嘛、まだアシユラの本当の姿を見せるわけには行かないもの、少なくとも木の葉にいる限りは……」

『滅ぼせばいいだろ、ゴミ溜めの里ではないか!』

「開発中の術が全部完成したら、それもいいかもな」

「この糞狐が、私のアシユラに何を吹き込んでんのよ!」

「でも俺つてば木の葉の連中嫌いだつてばよ」

『まあ気持ちは分かるがなアシユラ、その想いを何とかせんとアレはできんぞ』

「そうよ、アレは正しき怒りでなければ応えてくれない」

「わかつてるけど、どうしようもないつてばよ。」

でも先生や三代目、それからあの子を護るためなら……
『それでいい、何も全てを護る必要はない、ま【あの2人】なら全てを護るのだろうがな』

その言葉に頷くアシユラだが、アシユラの育ての親である【あの2人】は何者なのだろうかと、時々思う事がある

「はあやっぱり私のものにはできないのかしら」

「ミコ、何か言ったかかってば?」

『まあ小娘には無理だろうよ、ワシはずっと見ていたからな、あのオカッパに夢中何だよコイツは』

「何の話だつてば?」

『はあ……』

鈍感すぎる男sp・・・アシユラであった

「そっだ忘れる所だった、母様からよ

断鎖術式は人間には無理、風遁を極めて模倣せよ!

だそうよ」

「うくん……そうだ!螺旋丸だつてばよ!」

『何か思いついたのか?』

「明日のおたのしみだつてばよ!ニシシシ」

「まあ頑張りなさいな、じゃ私は戻るわ」

「おやすみミコ」

「ええおやすみアシユラ」

翌日演習場

『それでどうするつもりだ?』

「まあみてろつて」

そう言つて素早く印を組んで術を発動させる

「風遁、風圧拳!」

『ほう、螺旋丸をヒントに新しい術を開発したか』

風圧拳（ふうあつけん）、自身のチャクラを乱回転・圧縮させる螺旋丸と違い、風を掌に圧縮させ爆発的な威力を持つ球体を作り出す術である

使い方によっては自身の推進力や盾にする事もできる

術者によつては変幻自在にその形を変えることができる

『それでどうするつもりだ?』

「こうするんだつてばよ!」

そう言つて、風圧拳を手から離し、足で蹴った

結果は……凄まじい推進力で遙か上空に跳ぶも、破裂した

風圧拳が暴走、演習場の一角をその暴風で破壊した

「げっ！やっちゃまったってばよ！」

『課題その1だな』

「まずは暴走しないようにするか……はあ」

『暢気に構えているが……』

「何だってば？」

『……落ちてるぞ』

「……早く言えってばよ！どうすんだよ！」

『課題その2だ』

「うっせええええええ」

1000mほどの上空からの自由落下、当然既に調査のため近くにいた暗部数名と上忍が1名赴いていた

「あああ、なあにやってるのかねえ」

「どうします？捕まえて吐かせますか？」

「いやいいよ、一度あいつと話してみたかったし、後で俺から火影様に報告しとくから」

「わかりました、ではお願いします」

「ん」

「……うわああああああああ」

「よつと」

上忍に足を掴まれた、その上忍は銀髪で片目を額当てで隠し、マスクをした長身の男だった

(畑……カカシ……)

冷めた目で見えるアシユラ、恩師の子を守ろうとも引き取ろうともしなかった、我が身がカワイイクソ野郎だ

と言うのがアシユラがもつ、カカシへの印象だった

「アカデミーの生徒が何をやっている？(何て目をしてるんだ、これがアカデミー生がする目か?)」

「……」

「黙秘か、風波アシユラ」

「……」

「黙秘するなら構わんさ。だが、お前が里に害をなすと言うのなら容

赦しない」

「ちよつと術の練習をしていただけだ、広い場所が必要だったから演習場を借りた」

「聞き方を変えようか、何をしようとしている」

「……」

「また黙秘か」

「あんたには……いや、この里の人間には関係ない！」

「どう言う意味なっ！」

バリンと言う音とともにアシユラが砕け散った

「何だこれは……」

それは鏡だった、一体何をやったのか見当がつかない

確かにカカシはアシユラを捕まえていた、それは間違いない
ではいつ入れ代わった、鏡だとしたらあの感触はなんだ？

変化？分身？そんなハズはない、術を使った形跡すらなかった
隠行もカカシが見失うほどに完璧、さっきまであった気配も0
完全に逃げられてしまったようだ

「はあはあ、死ぬかと思った、ミコ持ってきて正解だった」

『相変わらず逃げ足だけは一級品だな』

「ふう着いた着いた、明日に備えて飯食って風呂入って寝るってばよ」
『試験は分身か変化だな、分身なら影分身でもしておどろかせてやれ』
「おうー！」

試験当日……

の前にタネ明かしをしよう

あの時落下しているとき、懐から死霊秘法の写本、ミコを取り出し、
現実と虚構の狭間を映し出す鏡、ニトクリスの鏡を発動、鏡から自身
を呼び出しそれをカカシに仕向ける

本体はニトクリスの鏡で見えないようにし、螺旋丸を作り出しそれを
蹴って一気に逃亡

着地後走って家に戻ったと言うことだ

では試験を始めよう

「ようアシユラ、試験は分身だつてよ。めんどくせえなあ」

「おはようアシユラくん」

「オハヨー、見てろよ、すっげえ術で一発合格してやるつてばよ！」
「うん、頑張つてね！」

ザワザワと騒ぎ出す教室内、少しだけアシユラに聞こえてくる言葉がある

「ドベが何か言つてら」「ヒナタちゃんもあんな奴の何がいいのかしら」「シカマルも何であんな奴と連んでるんだか」

そんな言葉を聞いてこう思う

これが三代目の言う家族なのかと、あの頃から少しも変わっちゃいない、きつといつか滅ぼされるんだろうなこの里は

こうも思う

もしその時になつたら俺はどうするんだろう

放つておいて逃げるのか？

好きな人だけ守るのか？

それでいいんだろうか、それを実行したとして、2人の父ちゃん母ちゃんに顔向けできるだろうか

(惱めアシユラ、無垢なる刃は憎悪の空より正しき怒りの下に顕現するのだ。今のお前にその意味が分かるか？)

そして両親と兄妹が喚ぶアレは……そう言うものなのだ

「アシユラくん、いこ？」

「アシユラこつちだ」

「おう！」

席に着くと扉が開き教諭が入ってくる、約3年世話になつた海野イ
ルカだ

「騒がしいぞ、今日は前から伝えていた通り、卒業試験だ。名前を呼ぶから、呼ばれた者は別室にて行う。」

質問はあるか？無いなら始めるぞ！

こうして1人また1人と試験に合格していく、中には数人不合格の
者もいたが、卒業後は家業を継ぐらしい

そしてアシユラの番が来た

「風波アシユラ、さあ来るんだ」

「おう！」

「頑張つてねアシユラくん！」

「まあ頑張れや」

別室

「さてアシユラ、試験は聞いてると思うが分身の術だ、やってみてくれ」

「あまり気張らず、リラックスだよアシユラくん」

試験官は2人、そのうちの1人にただならぬ悪意を感じた

『ふんあいつか、何をしようがワシが無効化してやる、あれをやってやれ』

(おう)

影分身の印を組むアシユラ

(アシユラ、印が違うぞー！)

(何をするつもりか知らんが、ドベのお前を利用させてもらうぞ、金縛りの術！)

『無駄だ小童！』

「影分身の術！」

煙が立ち込めた、イルカが慌てて窓を開けると、外からの風で煙が消えていく、なんとそこには

「「「どうだ！すっげえだろ!!」」」

10人以上のアシユラがいた、そしてそのどれもが実体をもっていた。

「うん、風波アシユラ合格！額当てだ、よく頑張つたな！」

(くそ、何であんなドベに俺の術が………忍者辞めようかな)

アシユラは教室に戻るなり

「じゃじゃーんどうだ！一発合格だ！」

つづく

第3話 班を決めるってばよ？

卒業試験の翌日、アシユラは再び演習場へと来ていた

暴走の痕跡を探っていると、三代目が現れた

「風波アシユラじゃな？」

「ん？ああ三代目のじつちゃんか」

「何をしておるんじや？」

「術の痕跡を調べてる、暴走の原因が分からないと、改良できないからね」

「昨日の暴風事件か、報告は聞いておる」

「じつちゃんは何が聞きたいんだってば？」

「うむ、昨日の鏡についてじや」

「企業秘密だつてばよ、あの術はまあ血継限界みたいなもんどだけ言っとく」

「そうか、お主はうずまきナルトを知っておるか？」

「……」

バレてる？アシユラはそう思い焦りを感じ始めた

「……ふむ、では木ノ葉は好きか？」

「里も住む人間も嫌いだ、だけど治安は他里より良いから」

「では最後にもう一つ、忍者になって何を成す？」

「別に、強くなつて護りたいモノを護るだけだ」

「そうか」

それを聞いて嬉しかったのか、三代目火影猿飛ヒルゼンは顔をクシャクシャにして笑い、その場を後にした

その時の目は、まるで孫を見守るようなそんな優しい目をしていて、アシユラがまだ3歳の時に見た心に残る優しい目だった

「ううつ、あの顔は反則だつてばよじつちゃん……」

『ナルト』

アシユラは泣いた、嬉しかったのだ、何一つ変わっちゃいないこの里で、変わってほしかったけど変わらなかったヒルゼンのあの優しい笑顔が

そんな気持ちのせいかな本当の名を呼ばれても気付かなかった

「分かっている、俺が目指すのは三代目のような慈愛の心と父ちゃんのような正義だ、それがアレを成功させるのに必要な事も！」

『少しずつで良いんだぞ』

「ああ！そうだ、九喇嘛何か分かったか？」

『そうだな、原因の一つとしてだが、お前から離れると球体を維持できなくなるようだな』

暴走時の痕跡と、一昨日の事を思い出した上での推測に過ぎんがな、論より証拠だよってみろ』

「おう、風圧拳！」

『威力を最小限にして投げて見ろ』

「わかった！」

上空に向かって投げて3秒後、術が暴走し猛烈な風がアシユラを襲ったのだ

なんとか踏ん張ったものの、普通の子供なら簡単に飛ばされていただろう

『あれで最小限か、思いつきでとんでもない術を編み出したな、意外性 No. 1だなお前は』

「照れるってばよ」

『ほめてないんだがなあ』

「それよりさ、帰って改良案を考えようぜ」

『そうだな』

アシユラが帰った後、ヒルゼンは影分身で1人と一匹を見ていた、そばにいた小型の狐からは九尾のチャクラを感じ取り、やはりそうだったのかと、影分身を通じてこの会話を聞き、1人涙した

その後ヒルゼンが暗部や上忍の実力者に命じた、九尾搜索任務は全て打ち切られた

数日後

「九尾の搜索を打ち切るとはどう言う事だ！三代目」

声を荒げ火影執務室に入ってきた中老の男

額に油と書いた額当てをし、白髪で巻物を腰に付けている

「自来也か」

「見つかったのか？」

「そう言うわけではない」

「では何故です、あの子は四代目の忘れ形見だ」

「もうよいと思っただのだよ、真剣に探す者はお前とカカシの2人のみ、だからお前には別の任務をあたえる、ランクはS

入手した情報は全て特A級の機密情報となる」

自来也は思う、一体どのような任務なのか

特A級の機密情報……

それよりも何故もうよいと三代目は思ったのか……

何か独自に情報を得、その情報から考えている何かの確信が欲しい、そんな所なのだろう

「それでその任務と言うのは？」

「……この少年に関すること全て。但し」

任務終了まで対象への接触を禁じる、任務期間は中忍試験1週間前まで

それまでに集められるだけ集めること

「この子がどうかしたのですか」

「名を風波アシユラと言う、3年前、木の葉に来る数ヶ月前より前の情報が一切無い」

「出身地、親兄弟全て不明ですか」

「そうだ、誕生日は13年前の10月10日、但し自己申告だ」

「他に情報は？」

「ここからは資料に書いておらんが、特殊な術で姿を変えていること、写輪眼・白眼共に見破れん。

関連しているかはわからんが砂隠れにて」

「守鶴と九尾の戦闘の噂有り」

「知っておったか」

「ですがこの噂……2つある、9つの尾を持った何かが砂隠れで守鶴と争っていたこと。

もう一つは、巨人と共に9つの尾を持った黄色い何かが守鶴を圧倒

していたと言う話だ」

「カカシより詳しい噂だな」

「噂は噂、実際に見たものが見つからんです。砂に情報開示するよう頼めませんか？」

「既にやっておる、だがこの件に関する情報開示はできないと、返事がきておる」

「………同盟を結んでいても成らぬものは成りませぬか」

「で、やってくれるか？」

「一つだけ」

「なんじゃ」

「この子が最初に目撃された場所は？」

「現段階では………」

「………やはり………この噂ただの噂ではなさそうだ。」

ワシが行くしかないようだ」

「頼んだぞ自来也」

風波アシユラの出生と、経歴を探る調査が本格的に開始された
卒業試験から1週間後

担任だったイルカがクラス全員に説明していた
担当となる上忍のついて、班分けの方法などだ

そして班が発表されていく

アシユラは第7班となり、メンバーは風波アシユラ、うちはサスケ、
春野サクラの3人である

発表から1時間、2時間と経過していくが未だに担当が来ない

アシユラは暇だった、そう暇だった

あまりに暇だったため元来の性格が疼き出した

そう、イタズラ小僧である

罨はシンプルにドアに挟んだ黒板消し、もちろんチョークの粉タツ
プリのやつだ

それからさらに数時間後………

「7班おまた」ボフツ

黒板消しが白髪に落ちた

畑カカシだ、先週演習場を借りた時に捕まったあの上忍だった
「お前ら嫌いだ……」

内心大爆笑のアシユラはどうやっておちよくるか、脳内会議が始
まっていた

「……屋上に行くぞ」

「おいウストラトンカチ、屋上だぞ」

「さつきと着なさいよね」

「wwwwww」

堪えきれない笑いを堪えながら手で返事をする

『アシユラ、マダオがGJだよ。ヤレヤレ何が楽しいのやら』

「はあはあふうふう、おk把握。じゃあ屋上に行くつてばよ!!」

ようやく落ち着いたアシユラは、呼吸を整え屋上へと向かった

「ようやく来たか、それじゃ自己紹介をするぞ」

「じゃあ先生からお願いします」

そう催促するサクラ、それに続くサスケ、当然だと冷やかな視
線を送るアシユラ

カカシは、仕方なく自己紹介を始める

「名前は畑カカシ、好き嫌いをお前等に教えるつもりはない、趣味は
まあ色々だ、将来の夢って言われてもねえ」

「畑カカシ、木の葉の里の上忍、下忍時代の担当上忍は後の四代目火影
波風ミナト、班員はうちはオビト、野原リン。3名とも戦死。サンマ
の塩焼きとなすの味噌汁が好物、天ぷらと甘いものが苦手

趣味は木葉の三忍自来也著のイチヤイチャシリーズ読むこと

後悔していること、ある少年を守れなかったこと」

と言い切ったアシユラ、それを無言でみる3人

「どこで調べた？」

「マダオから聞いた」

「……マダオとは何者だ？」

「言うと思うのか？忍びが情報源を漏らすと思うのか？」

「……じゃあ次は赤髪のお前だ」

「わかった、風波アシユラ、趣味はある技術を忍術で再現するための技

術開発、好きなものはラーメン、嫌いなものはこの里とここに住む連中、ここで住むのは治安が良く技術開発の時間を取れるから

この里嫌いだけど任務中に私情ははさまねえ

まっすぐ自分の言葉は曲げねえ、それが俺の信念だ」

「(こいつは一体何を見ているんだ・・・)じゃあ順番にやって」
サクラもサスケも普通の自己紹介だった、ただサスケは復讐に取り付かれているようだった

アシユラにはその気持ちがよくわかった、アシユラ自身も復讐を考えていた時期があった

木の葉を滅ぼし、住民を皆殺しにするのだと、九喇嘛と友になるまではそんな事をずっと考えていた

何故考えを変えたのか、それは養父と実父との対話だった

養父と主に暴力言語で語り合い、実父とは主に肉体言語で語り合っ
た

「なるほどね、じゃあ明日は演習するから、このプリント読んでおいて。朝は抜いてくること、さもなければ・・・」

「・・・」

ゴクリと唾を飲み込む3人、カカシから次の言葉を待つ

「吐くぞ」

はあつとアシユラは溜息をついた。吐くだけなら大したこと無いと感じた。

しかし疑問が残る、演習ならアカデミーで散々やってきた、今更ではないかと

「お前等の疑問に答えてやる、この演習に合格できない場合は、下忍資格を取り消しアカデミーに戻って貰う。合格率33%。死ぬ気で臨めいいな？」

アシユラはそれを聞いて考えを巡らせ、サスケはフン！と余裕の表情を崩さない、サクラは緊張した面持ちだがはい！としっかりと応える

「じゃ、今日は解散だ」

サスケは復讐者、サクラは今時の女の子、アシユラは今年の下忍候

補で最も危険な奴だ

と言うのがカカシの評価、サスケもサクラもカカシからすれば蟻と象というレベルだ

だが問題はアシユラ。一週間ほど前、いつの間にか鏡とすり替わり、その見事なまでの隠行に舌を巻いたほど

考えてもまともな対処法が思いつくわけでもなく、演習で確かめるしかなかった

気になるのはあの目と、里が嫌いだと言いつつ切ったこと

少なくとも過去にこの里で何かをされた、それが原因で強く憎むようになつた、そのくらいしかアシユラについて判明しなかつた

そして夜は更け、新しい日へと進んでいく……

つづく

第4話 演習鈴取り合戦

鳥が鳴き出す頃、アシユラは朝飯を作っていた米を炊いて、おにぎりの具材を用意していく

おかかと梅のおにぎりを3つずつと、自身の朝食にカップラーメンと塩おにぎりを3つと油揚げを1枚、どうせ遅刻してくるだろうから間食用に塩おにぎりをもう2つ

お湯が沸いたところでカップラーメンに注ぎ、待つこと3分

「いただきますー！」

ズルズルズルハフハフズルズルズル

と言う音が静かな部屋に響き渡り、5分ほどで完食

九喇麻と味覚をリンクして、最後に油揚げをいただく

「ごちそうさまでした」

『まあまあだな』

毒の入っていないご飯に感謝を込めてのいただきますとごちそうさまでした、両親に引き取られしばらくして食べるようになってから始めた、父より教えられた食事の作法の1つで、以来欠かすことなく続けている

幼少時には毒入りの食物を幾度と無く食べさせられた、だから毒のない食事はアシユラにとって何よりも大切な時間である

「九喇麻たまには美味しいって言えつてばよー！」

『ふんまあまあなものまあまあなのだ』

「じゃあ明日から油揚げ無しだ」

『……………チツ、ああウマカッターウマカッター、明日も頼むぞ』

素直じゃねえなあ、とぼやきながらも準備を済まして

「行ってきますー！」

いざ演習場へ！

「おはようつてばよ」

挨拶するも先に着いていた2人からは返事がない

「嫌いでも何でもいいけど、挨拶くらいするもんだつてばよ」

「……………フン」

「私嫌いなヤツに挨拶しない主義なの」

「……あつそ」

それから4時間が過ぎ、もうすぐお天道様が真上に上る頃だ

「まだこなさそうだな」

そう言つてアシユラは、これ見よがしに2人の前でおにぎりを食べる

やっぱり朝を抜いてきたのか、物欲しそうにこつちを見てくるが、嫌いでも挨拶しない相手にやるものはない

残りの梅とおかかのおにぎりは後で食べるつてばよと、2人に聞こえるような声で言つてみた

すると

「……お、おはよう」

サクラが折れた

「もう昼前だけとおはよう、梅のおにぎり食うか？同じ吐くなら、何か食つて吐いた方が楽だつてばよ」

「あ、ありがとう……」

嫌いで嫌いで話したことも無かったけど、こいつつて意外と良い奴？と思ひながら食べた

アシユラに胃袋を掴まれた瞬間である

そしてついに

「……」

「……何か用か？」

「っ！……お、お、お」

「おっ」

「お、おは、よう……」

サスケも折れた

「おはよう！おかかのおにぎりしかないけど食うか？」

「お、おう」

くそ！見せびらかしやがつてと内心毒づきながら食べた

サスケもまたアシユラに胃袋を掴まれた

そんな様子を見ていたのか、サスケが食べ終わると同時にカカシが

やあやあスマンスマン、家を出たら黒猫に追い回されてねくと、嘘にもならない嘘を吐く

「早速だが始めようか」

演習の説明をするカカシ、鈴は2つでこれを奪えれば合格、奪えなければアカデミーに逆戻りとなる

そして鈴は2つしかないと言うことは、必然的に1人がアカデミーに戻る事となる

制限時間はカカシの持つ時計が鳴るまで、忍具忍術何でもありの演習だ

「それじゃ始め！」

カカシの合図と同時にサスケ、サクラは散開

アシユラは煙玉を取り出し、発火させる

辺り一面煙だらけになり、気配を消して行動を開始する

（ほう、この前も思ったがやはり隠行が上手いな。だが!!今日はそうはさせない）

右の死角からアシユラの一撃が迫る、それをギリギリで回避

反撃に移るも手応えが無く空を切る、気を抜く暇もなく追撃、一瞬だけ手が見える、その手には乱回転しつつ圧縮されたチャクラがあった

（あれは螺旋丸! あいつどこであの術を、また聞くことが増えたな）

煙玉の煙は晴れることなく辺りを覆い尽くす、埒があかないと判断したカカシはほんの一瞬だけ写輪眼を使い風遁・大突破を発動させ煙を払った

「げっ、さすがカカシ上忍、風遁も使ってくるか」

『一瞬だが写輪眼を使ったようだ、一旦離れるか?』

（そうするってばよ）

そう言つてアシユラは木々の中へと消えた

「ふう、まさかだった。さてどう出るアシユラ」

その頃のサスケとサクラは

「何だあいつ、あんなに強かったってのか………糞! アカデミーで実力を隠してやがったのか」

最後の方でかろうじて見えたあの術も気になるが
煙玉をうまく使った攻撃、上忍相手によくやる!」

サスケは焦っていた、アカデミーの成績ワースト1のアシユラの実
力を垣間見てしまった

だがアシユラは別段強いわけではない、ただ忍びらしく戦っただけ
なのだった

「サスケ君どこかな?アシユラも何だか煙玉使ってどこかに行ったみ
たいだし、ふふふ」

そしてサクラは何も見えていなかった

「おい春野、手貸してくんねえか?」

「ギャアアアア!ってアシユラビツクリさせないでよ」

「はいはいゴメンゴメン、じゃあ手貸してくれ」

「イヤよ、私はサスケ君と合格するの」

「……………わかったってばよ」

「おいうちは、手貸してくれ」

「黙れ、俺は1人で鈴を取る邪魔をするな」

「……………(どいつもこいつも、試験の意味分かってんのか)」

そしてアシユラは再びカカシの前へと進む

「で、何か分かったのか?」

「この試験の答えはわかった、けどあの2人は……………ね」

「まあお前はもう合格でもいいだろう、一応聞くが答えとは?」

「チームワーク、これがなきゃ生き残れないし、任務を達成できない。

実際カカシ上忍、あんたが一番これの大切さを分かってるんだろ
?」

「自力で答えにたどり着いたか」

「それにさ、そうでなきゃ最初から班分けなんて意味ないし、たかが
チャクラと体術の基礎くらいで忍になれるかってばよ」

「良いだろう、お前は向こうで弁当食ってろ。」

「一つ言っておくが他の2人には食わすなよ」

「気分次第だつてばよ（今度は本当にできるのか、試す気満々じゃねえか）」

『全くだ、合格でもいいだろう、と言うことは。裏を返せばまだ合格ではないと言うことだ』

（忍びは裏の裏を読むべしか、くだらねえ試験だつてばよ）

それからカカシはサクラを幻術にはめ、弁当を食う間もなくアシユラがそれを解術し、サスケを埋めればアシユラが助け出す

にも関わらず二人はまだ気付かない、演習の目的に……

そして時間がきた

「先ずは結果を言うぞ、アシユラ以外アカデミーに戻る必要はない」

「それじゃあー！」

サクラが喜ぼうとするもカカシが続ける

「お前ら二人は忍者になる資格もないガキだ、さっさと家に帰れ」

「なんだとー！」

「言わなきゃ分からないか、この演習の目的はチームワークだよ。アシユラはまあそれに気付いてある程度実践できていた。どこが、とは言わなくてもわかるな？」

カカシはチームワークの重要性を説き、さらに殉職者の石碑を見せる。この中に下忍時代の仲間だった2人と、当時の師の名が刻まれていることを伝えた

チームワークができない奴は、自分ではなく仲間を殺すのだと、だからできない奴は忍者には必要ないのだと締めくくる

「アシユラ、サクラ、サスケを丸太に縛れ。その後弁当食って午後に備えろ。午後はもつと厳しく行くからな」

そう言つてカカシは煙と共に消えた

「さてうちは、何か言うことは無いか？」

「くそ、今すぐ開放しろ！」

「縄抜けすればいいだろ？」

「ちよつとアシユラ、止めなさいよ！」

「黙つてるブス」

「なんですつてえ!!」

「名字呼ぶのもアレだし、名前で呼ぶぞ」

「その前にブスって言ったの取り消せ！」

(何て縛りかたしやがる、抜けられねえ)

「ほいサスケ、あくん」

「何のつもりだ」

「サクラも早くしろ、遅刻魔が帰ってくるぞ！」

「そっかそう言うことか、じゃないブスを取り消せ！」

「くそ、早く口に入れろ！」

そんなやりとりを影分身のカカシは見ていた、そんなやり取りをする事1時間が経つと

「お前らああああ！サスケに飯を食わせたな！縄を解いたな！どういうことだ！」

「飯食わさないと足手まといだつてばよ」

「ちゃんと休憩しないと、力を出せないしね」

「……ほう、その心は？」

「チームワーク……だろ」

「よし、お前ら！ごうかつく！来週から任務だ、今日はしっかり休んどけ、明日下忍着任と忍者登録の書類が届くから、良く読んで登録しに行くこと」

怒りの表情から一転笑顔になったカカシは、三人に合格を申し渡した。明日以降の説明と最後に、アシユラだけ残るよう伝え解散となった。

「さてアシユラ」

「説明ならしないよ、する必要がない」

「わかった、なら何の術を使おうとした？」

「うくん……それくらいなら。未完成だけどな、風圧拳って術」

「お前が作ったのか？」

「そうだってばよ、でも制御に失敗してあんなった。あつ、術の詳細は秘密だってばよ。未完成だしね」

「もう一つ、その術で何をするつもりだ？少なくとも下忍の使う術じゃない」

「父ちゃんの必殺技の一つを模倣してるだけだ」

「大十字九郎と言う人物だな？」

「そつ、ちゃんと戸籍見てきたんだな」

「まあな」

「じゃあ俺これから一楽に行くから」

「待てアシユラ……行つてしまったか」

お前は本当に何者なんだとカカシは思った、そしていつか必ず過去を洗い出してやると決意した。そうこの里を守るために

第5話 忍者登録とライバルだつてばよ

下忍合格の翌日

「九喇麻おはようだつてばよ」

『ああおはよう、それより机を見てみる』

「ん？机？」

九喇麻と挨拶を交わし促されるままに机を見ると、馴染み深い気配がした。そう死霊秘法の写本、ミコである

「おはようアシユラ」

「ミコ、おはようだつてば」

「まずは母様からよ、『義理とは言え、妾の息子であれば合格して当然、これからも精進せよ！』だそうよ」

『相変わらずだな』

「次は父様よ、『よくやったな、任務は何でもやるんだぞ。でないとないと……うわあはああん』赤貧時代を思い出して話にならなかつたそうよ」

「父ちゃんカツコ悪いってばよ」

「兄様と姉様からもあるけど、聞く？」

「またの機会で頼む……辛辣なコメントが頭を過ぎるつてばよ……」

この後は寝起きの日課を済ませて朝食を取る

今日は、久しぶりにミコと食事ができるので、せっかくだからと九喇麻も呼び出し和気あいあいと食事をした

そしてアシユラはポストを確認する、火影名義で書類が着ている、忍者登録のための書類だ

封を開け、書類が揃っているか確認する、記入が必要なものに記入し出かける準備をする

ミコは父の筆跡を真似、同意書にサインし書類全てを整えて、書類が入っていた封筒に入れた

「うっしーミコはどうするんだ？」

「残った魔力を取っておくわ、私が必要な時に呼んで。制限時間は2

0分よ、良いわね?」

「わかった!」

『儂はそうだな、まあいい中に戻るぞアシユラ』

「おう!」

「じゃ、行つてきます!」

「行つてらっしゃい!」

そう言うともミコは魔導書の姿へと戻り、九喇嘛もナルトの中へ戻り、部屋の中に静けさが戻った

そして火影執務室へと向かう

火影邸に着くとまずは写真撮影、その後書類を提出し、身分証明書や、忍者として他国へと行く際に必要となる忍者登録証ができるまで、火影執務室で話を聞いた

そして登録証を受け取り帰ろうとすると執務室の扉が開いた

「ジジイ!勝負しろコレ!ついたあああ!」

勢いよく入ってきた子供が転んだ、その後すぐに毘旦那だとわめき始めた

「.....おい大丈夫かってば?」

「さっきの毘はお前の仕業かコレ!」

「いやお前が勝手に転けただけだろ」

「う、うるさい!」

「やはりここですかお孫様!さあ勉強の続きですぞ」

「うるさい、お孫様お孫様って、オレの名前は木の葉丸だコレ!」

(そうか.....)

「申し訳ありません。すぐに連れて行きますので」

「おいガキ」

「何するんだコレ!は、放せ!」

「良いから黙って付いて来い木の葉丸!」

「え?うわああああ」

そう言つて木の葉丸を執務室から連れ出したアシユラは、先日の演習場へと向かった

「ふうここまでくれば大丈夫だろ」

「何なんだよお前！」

そう木の葉丸が言うのとガン！と言う良い音が木の葉丸の頭から聞こえた

「お前じゃねえ、風波アシユラだ!!」

「アシユラ兄ちゃん？」

「おう！」

「それで何なんだよコレ」

「少し親近感がわいた。俺も昔は、名前なんて、三代目の爺ちゃんとか、一楽のおっちゃんにしか呼ばれなかったからな」

「兄ちゃんも？」

「ああ、詳しくは言えないんだけどな」

ニシシと笑うアシユラを見た木の葉丸は思った

「オレが子分になってやるんだなコレ！」

「はあ？」

「お前が先で、オレが後だから子分だ」

「ああ、そう言うことか。ホントムカつくよな名前以外で呼ばれるのはよ、俺もいつかこの里のバカどもに認めさせてやるんだ、俺は俺だ、化け物じゃねえってな！」

俺達にも親から貰った命があるんだ、名前があるんだ、だから俺は親から受け継いだ意志だけは絶対に護る

そんで、自分の言葉は真っ直ぐ曲げねえそれが俺の忍道だ!!」

「にい……ちゃん？」

「……見つけましたぞ木の葉丸君！」

「見てろよ木の葉丸、こういうむつつりメガネにはこうすんだ！影分身の術!!続いて変化!!」

「「うっふくん」」

「あああオジ様どうされましたの？」

「あらやだ、は・な・ち・出てますわ」

「オ・ジ・さ・ま・のスケベ」

「ななななな、何というハレンチな！ううう」

ブツパアアアアと鼻血を噴出させて空の彼方に飛んでいった

「名付けてハーレムの術！」

「これを見た木の葉丸は決意した

「子分なんかやーめた！」

「もう飽きたのか」

「うん、これからはどつちが先に里の皆に認められるかライバルだコレ」

「……おう！」

アシユラは思った、俺にもあの時木の葉丸のような強い意志があれば、あの状況を変えられたのだろうか、自分に良くしてくれた兄ちゃんを傷つけずに済んだのだろうか

だが今はどうでもいいとも思った、過去(きのう)は変えられないけれど現在(きょう)は未来(あした)は変えられるのだから

ちっこいライバル、だけど絶対に負けないと自分の忍道に賭けて誓った

その頃鼻血噴射で飛んでいった、黒い忍び装束のメガネ上忍は

「風波アシユラですか、一体何者なのでしょう、彼も過去に何かあったのでしょうか。名前を呼ばれない辛さですか、考えもしなかった……」

ここに1人アシユラを認めようとする人物が現れた

第6話 2人と1匹の思うところ その1

シカマル

3年前、変な奴がアカデミーに来た

赤毛で少し長い髪の奴だ

見た目は普通だ、どこにでもいるオレらと同じガキンちよだ

だが、何でかあいつを見ていたら、言い様のない違和感を

感じた。その違和感が酷く気持ち悪くてな、数日後変化の実習があった

その時に気付いた、こいつは何故だかわからねえが姿を変えてるんじゃないかってな。それも高度な術でな

普通なら変化の重ね掛け何かしない、でもあいつはそのまま変化を容易にしていた、その変化を見なきゃわからなかった。胸のつかえがストンと落ちた、そんな感じでスツキリしたのを憶えている

いつかの冬にこんな事もあったな、駄菓子屋の爺さんと婆さんに殺気をぶつけていやがった

一体こいつの過去に何があった？一緒にいた他の連中は気付かなかったみたいだが、オレの目はごまかせねえ、あの時のあいつの目は普通じゃなかった。まるで命を狙われた奴が復讐するかのような目だった

隣にいたオレも嫌な寒気がしたぜ、その気になればいつでも殺せるんだと言わんばかりの殺気だった

それをまともに受けた爺さんと婆さんは、その後1週間ほど寝込んでらしい

それから、あいつがどんな目で里を見てるのか考えてみた、普通の笑った顔をするのは誰か？あの目を向けるのは誰か？

なんてことはねえ、すぐわかった。里の大人ほぼ全員をあの目で見てやがった。笑ってるのは極々一部だ、三代目に一楽のオヤジ、それからイルカ先生だ

それに気付いてから、親父を通じてあいつの過去をそれとなく探ってみた。結局わかったのは何もわからねえってことだけだ。精々親

の名前と何をしていたのかくらいだ。そんなわけねえだろ、あいつは間違いなく幼児期にこの里にいたはずだ。そこで何かがあつたんだ、でなきゃあの目の説明ができねえ

その後からだ、あいつとよく話すようになったのは、里の連中に自分を認めさせる何て言ってたけどよ。気付いてるか？お前の行動とその想いは矛盾してるってよ

ヒナタ

3年前転入してきた風波アシユラ君。どことなく、昔私をイジメから助けてくれた、名前も知らない金髪の男の子に似ている

転入初日に何となく気になって、うまく言えないけど、何か違和感を感じた。だから白眼で彼を見た……

するとどうだろう、彼の姿がぼやけて見えた。何故だろう、チャクラとは違う何かなのかな？

だとしたら彼は何者なんだろう？この里に危害を加えるような事はしないよね？

そう言えば最近はそのことばかり考えているような……無事卒業もできたし、私は紅先生の試験に合格して下忍になれたけど、アシユラ君は合格できたのかな

(隣同士の席だしこれからよろしくな！えつと……)

(ひっヒナタ、日向ヒナタです。よろしくお願いします)
(おうよろしくなヒナタ)

はうつ、あの笑顔を思い出したら……あうあう

1時間後に妹のハナビに起こされました、はあ何やってるんだろう
私は……今度はいつ会えるかな

九喇嘛

まだまだガキだなナルトよお

わかっているのか？お前の心はまだまだ憎しみでいっぱいだ

そんなお前を認める奴の数なんぞたかが知れてるぞ

それに認められてお前は何がしたい、火影を目指す訳でもない、この里に永住する気がある訳でもない

認めさせることが目的になってるのなら、お前は近いうちに折れるぞ

儂は氣力を失ったり、挫折したお前を見たいとは思わん、だから認めさせた後の事も少しは考えてくれよ

いつかお前の全てを受け入れてくれる人間が現れると良いなあ

第7話 任務開始だつてばよ

「アカそっちはどうだ？」

「目標補足、顔を洗ってる」

「了解、クロはどうだ？」

「問題ない、例の草にアレも用意している」

「了解、モモは行けるか？」

「はい、何とかやってみます」

ある日の昼下がり、依頼人の元から逃げ出した、ある意味極悪非道の獣を捕獲するという任務を受けた第7班は、その獣を補足し今捕らえようとしていた

「よし、各員行動開始！」

「了解！」

「おい！」

「ニヤツ？」

「お前は今から俺の幻術に堕ちて貰う……」

「ニヤニヤ」ムズムズ

(頼んだぞサクラ)

「まだよ、もう少し……もう少し」

「ニヤアアア！」パシッパシッ

何と第7班は猫の捕獲作戦を遂行していた

「今よ！」

「フツニヤアアア」

「バカ！何やってんだってばよ！」

「追えアシユラ！」

結果は失敗、即座にプラン乙に切り替え、アシユラの追跡捕獲へと動き出す

そしてついに……

「ニヤア……ゴロニヤアン」

猫は捕らえられた、猫好きのアシユラにかかれば一瞬だった

逃げたのも束の間、アシユラに先回りをされ、人懐っこい笑顔を向

けられ、マタタビを香がされ、抱かれると大人しくなってしまった
ああ猫は何故斯くも可愛いのか、猫こそ正義である、但し躰された
飼猫に限る

「任務完了だってばよ！」

『了解、演習場に戻ってこい』

「ううまた足を引つ張ってしまった・・・・・・」

「気にするな、俺もアイツには何度も苦汁を舐めさせられている」

「うーん、チャクラを使った身体強化すれば一人でもできる任務なん
だけどなあ」

「どうやるのよそれ」

「まあカカシのおっさんに言ってみるか、何時になったら修行付けて
くれるのかって」

「だな、カカシめ、他の同期は着々と強くなってるのに・・・」

「そうよねえ、何時になったら恐らしい事を教えてくれるんだろう」

そんな愚痴をこぼしながら演習場に向かい、カカシと合流し猫を依
頼主に引き渡す。

「ああ私のトラチャン！もう離さないわよおん！」

「ニャアアアアアアアアアアア!!!」

アレでは逃げたくなるのも仕方ないなと・・・アシユラ達は
毎回思うのである

「さてお前達の次の任務は、ある人物にこの書状を届けて貰う、ただ居
場所がわからんから長期任務になるだろう。

まあ賭場にでもいるのだろうか・・・

ランクはC。但し、Sランクに変更となる場合もある」

と火影が言うと、サスケとサクラが驚きと戸惑いを見せた

アシユラは何となくその人物に心当たりがあった

カカシは誰なのかすぐにわかった

「わかっていると思うが、書状を見ることは許されない。

見れば投獄されるものと思え」

(まあ当然でしょ、明らかに機密文書だしね)

「届け先は千手綱手、見付次第書状を渡すように。またはその従者に

渡しても良い、くノ一の上忍で5大国で唯一の忍豚使いだからすぐわかるだろう」

「はっ、第7班その任務請け負います!」

「うむ、本来なら信頼の置ける上忍一人に任せる筈だったのだが、そやつは別任務で里を出ておる。

従って現在残っている上忍で任せられるのはカカシ、お前しかおらんのだ。頼んだぞ」

「はっ!」

「うむ、下忍三名は下がれ、カカシお前にはまだ話がある」

そう第7班に伝えると、アシユラ達三人は火影執務室を後にした

「カカシよ、お前はいつになったらあの三人に修行をつけるつもりだ?」

「はあ」

「大体この程度の任務であれば一人でもできるし、チームワークを大事にするのはわかるがな」

「そろそろやろうかと思っていた所なんですけどね」

「それとな、ここ最近任務中に、エロ本を読んでいると報告があるのだが?」

「ああこれですか?」

「やはりそれが自来也め、このようないかがわしい本を出版しよってからに……」

「知ってますよ三代目、三代目も暇なときに」

「いちやいちやしリーズの最新の原稿があるんだがいらぬかそうか」

「申し訳ありません出過ぎたマネをしそうになりました」

「わかればよい、何にせよ下忍たちに修行をつけてやれ。この長期任務の間にな」

「わかりました三代目」

「それとな、綱手だが、連れて帰ってこれるようならそうしてくれ。

ワシもそろそろ隠居して、ゆっくり読書を楽しみたいのでな」

「なるほど、そう言うことですか、善処しますよ」

「頼んだぞ」

翌日

第7班は長期勤務のため各員準備をしていた

サスケとサクラは忍具と旅の必需品を

アシユラは、二人と同じものに術の開発帳に、試作品の多面体の匣を1つ持つて行く

この多面体の匣は時空間忍術で、中はまるで宇宙のような空間に全長50mを超える何かが入っている……はずなのだが所詮は試作品。中身所か開くことも不可能

アシユラは時々これを解体しようと躍起になることがある

術の開発や、修行に躓いた時の暇潰しのつもりで持つて行くのだ

そしてさらに次の日の朝……

「全員揃ったみたいね、じゃあ出発するけど何か質問ある？」

「まずはどこへ向かうんですか？」

「まずはここから川沿いに湯の国の温泉街へ、その後火の国の短冊街へ向かう」

「その理由は？」

「いる可能性が最も高い地域だからだ、そしてこれはお前達への修行も兼ねている」

「修行ね……」

「そうだ、まずはチャクラコントロールを2段階に分けてやつてもらおう。そして温泉街・短冊街ではそれぞれ情報収集能力を鍛える」

各修行のクリア条件は後で伝えるとして、アシユラは別メニューを考えている

と、ここで何故かとサスケ・サクラは思った

その疑問をぶつけようとすると

「アシユラのチャクラコントロールはまだ荒削りだが、予定している修行は既に終わっていると見ている」

サスケは見ていただろうが、サクラお前は見ていなかったな、見せてやれアシユラ」

「はあ仕方ないてつばよ、はああああー！」

すると突如アシユラの手には球体が現れた、その球体は内部でチャク

ラが凄まじい勢いで乱回転していた、そして近くの木にそれを当てる
と・・・・・・・・その球体と同じ形の穴ができていた

「これは・・・・・・・・一体何なんです？」

「これは螺旋丸と言ってるな、四代目火影が考案・開発したチャクラの形
態変化の究極系と言ってる良い術だ

この術はチャクラコントロールが肝でな、正直基礎ができていない
者には絶対に出来ない代物だ

四代目の先生の話では、この術の習得難易度はA、チャクラの総量、
コントロール技術、諦めないド根性があつて初めて可能になる術だ

俺ですら片手で完全に発動・制御が難しい術だ。まっ、詳しくはお
前たちが中忍試験に合格できたら教えてやるよ」

説明を終え一行は演習場から里の門へと向かい、サスケとサクラは
内心で行ってきますと、アシユラは少々面倒だなど思いながら里の外
へと出発した

アニメ最終回記念特別編 白き翼と瞳

これは、ネジ兄さんのお父様、つまり私にとっては叔父様が亡くなつてしばらくしての事

ある日の夜、私は眠れなくて夜空を眺めていた時、白い翼で空を飛んでいる何かを見つけた

それはまるで、流れ星のように白い尾を引いて、南の空へと消えていった

これが私があの人と共に戦うきっかけになるとは、この時少しも思わなかった、何故ならまだその人は里に戻ってきていなかったから

次の日私は、お父様と護衛のコウに頼み込んで1日だけ、条件付きで外出する許可を頂いた。暗部の監視とコウを必ず傍に置くこと、夕刻には帰宅することが条件だった

早速外出した私は、里の南側へと足を運ぶと人集りができていた

何があるのか訪ねると、遙か西の異国から来たシスターという方だった。シスターは私を見つけると、純白の羽を差し出した。戸惑っていた私にシスターは「これはあなたのような子が持っているべきです」と言い、コウに確認してそれを受け取った

純白の羽は汚れ一つ無くとても綺麗で、4年ほど前まで肌身離さず持っていたほどだ

その後昼食を取り、再びシスターの所へ。コウは少し渋ったものの話をするくらいならと、私を送り出してくれた

シスターは私にこんな話をしてくれた

彼は探偵を営んでいますですが貧乏でだらしなくて、でもその胸には正義を掲げ、悪を理不尽を絶対に許さなかった

ある時教会の孤児院の女の子が、同じ孤児院の男の子から虐められていました

その女の子は、ある女性から貰った鏡を見つめていました

その事でもイジメを受けてしまい、ある時に女の子に眠る力を暴走させました

暴走した力は鏡に影響し、絵本の世界の住人を喚びだしてしまつた

のです

その住人は女の子以外の存在を傷付け始めましたが、貧乏でだらしない探偵が立ち上がり、それを倒しましたが、女の子はいつの間にか鏡の精に捕らわれ、巨大な獣が暴れ街を破壊していききました

その時高らかに詠われた聖句が聞こえました、響きわたると鋼鉄の神様が現れました

巨大な獣を圧倒しながら鋼鉄の神様は言いました、私が恐いかと、シスターが恐いか、ガキンチョどもが恐いか、世界のみんなみんな居なくなってしまうえば良いのかと

さらに続けていいいます、恐くて当たり前だと、そうやって自分の殻に閉じこもってたら怖くて当たり前なんだと

自分の気持ち相手を相手にぶつけて見ると、何でこんな事するんだと、噛みついてやれと、そうやって喧嘩して、最後に……友達になれればいいんだと

でも女の子は言いました、それでもどうしようもなかったらどうすれば良いのかと

神様は応えました、そんなヤツらは私が殴ってやると

そして女の子はようやく、神様の説得に応じました

鏡の精は女の子を放しませんでしたが、白い翼の天使に鏡の精から助け出されました

神様は仕上げとして神様だけが使える、浄化の炎で獣と鏡の精を浄化しました

その後女の子は、男の子とも仲良くなり、シスターや探偵さんにも心を開くようになりましたとき

この話を聞いて私は思った、黙っているだけじゃ私の気持ちは伝わらないのだと、だから帰ったらお父様に話そう私の気持ちを、そして少しでもお父様と兄さんの心を救いたいと

でもその願いも空しく、私ではどうにもできなかった

この日の帰りに再び私が誘拐されそうになったことも原因だと思
う、だから強くなることを決意した

帰りに起こった出来事はこうだ

「さあヒナタ様、約束の時刻です帰りますよ」

「はい。あの、シスター、ありがとうございます。私頑張ります！」
「頑張ってるね、ヒナタちゃん」

その時だった木の上から暗部の人落ちてきた、そして間髪入れずにコウが倒され誘拐されかけた

後で聞いた話によると、相手は雲隠れの暗部だった

恐怖に支配された私は、震えることしかできずに泣いた

暗部の手が私に触れる直前、光が目の前を走り、暗部の腕を焼き切っていて、その光景に私は気を失った

???

「このような往来で少女を誘拐しようとするとはな」

「貴様………何者だ」

「メタトロン！お前のような悪を裁くものだ！十字断罪（スラツシユ・クロス）」

「………ゴフツ」

「居るのだろう？この子達を頼む」

それから10年以上の月日が流れ

まっまだナルト君はお風呂だよね……………

メタトロン3号！十字断罪！

「ひっヒナタ？何で姉ちゃんの真似してんだ？」

み、見られた！は、恥ずかs……………

「ヒナタ大丈夫か!?気絶しちやっただよ……………」

こんな私だけど、今は

「仕方ねえ、布団に寝かせてつと、ニシシたまにはヒナタの寝顔を見るのも良いもんだな」

とつても幸せです

第8話 第一段階木登りの行だつてばよ

里を出て数刻が経過し、日が頭上に登ったころ

「ここら辺で休憩するぞ」

この辺りは木々が生い茂り、近場には川が流れている
道中休憩などの野営をする場合こういった場所になる

このような場所で、休憩と修行を行うのだ

「さて、とりあえずは座学から始める、これも修行の一環だ。

まずはチャクラコントロールとは何か、から始める」

チャクラコントロール、必要な時に必要な量を出し維持する事

術の調整、体内のチャクラの正常化、身体強化などをする際に必要
な技術

そして今回やつてもらうのは木登り、それも手を使わず足だけで行
う

「アシユラ出発前に手本を見せてやれ、出来るんだろ？」

「そう言うのはアンタの役目だろうに」

(腐るなアシユラ、そうだなあの木なんかどうだ?)

(そうだな、あといきなり話しかけるなつてば九喇嘛、バレるだろ)

(スマンスマン。まあ手本くらい見せてやれ)

(応!)

足の裏にチャクラを集中、微弱な放出量で吸着させる

数分後……

「カカシ先生着いたつてばよ」

「おおやるねえ。二人ともしつかり見ていたか？」

「スゴい……」

「チツ！」

「あああああああ!!」

「どうしたアシユラ！」

「いや何でもないつてばよ」

アシユラは思いついてしまった、そしてあの術の完成型が朧気ながら
らに見えてしまったのだ

「……早く降りてこい、二人に細かい説明をする（ヤレヤレ何を考えているのか）」

「ちよつと待って、メモを取りたいんだ」
「わかった」

足の裏だ足の裏にチャクラを集める、瞬身でも飛雷神でもない、超高速歩法とその時に発生する運動エネルギーの威力を具現化し、攻撃時足への負担を徹底的に排除した風圧拳とは少し違う術式の草案を急ぎメモをし、地上へと降りる

「さて、これから説明をしていくわけだが、見ていて気がついた事があれば答えてくれ、まずはサスケ」

「……極微量なチャクラを放出しているのはわかった、だが何で足の裏なんだ？」

「なるほど、質問の回答はこの後の説明で話をする、次サクラ」

「これって極微量を放出するだけじゃなくて、それを維持していますよね、針に穴を通すようなそんな繊細なコントロールなのはわかりました」

「なるほどね、2人ともよく見ていたな、これで何も無かったらどうしようかと思つたよ」

そして、カカシの説明が始まる

まずは、足の裏は最もチャクラを集めにくく、かつコントロールが難しい部位にあたるのだと、サスケの質問に回答する

期限は一週間とし、休憩中などは最初と最後の10分を除きこの修行を禁止した。と言うのも、まだまだ歩くのにバテた状態では予定通りに進まないからだ

この間もチャクラコントロールだけではなく、忍具や武器の使い方その応用を教えていく、フェイントの掛け方、1つの忍具で窮地に対してどう対処していくかなども教えていく。今後受けるだろう中忍試験で必要となる技術・知識を少しずつ……

最後にどんな窮地に陥っても、考えることだけは止めるな、必ず活路を見いだせると、諦めないド根性、忍び耐えること、これが師の師から受け継いできた忍としての心構えである事を

そうして一週間が経過した

「やっと登れた……」

「サスケ君おめでとう！」

「ギリギリだったがいいだろう、次は水面歩行だ」

「……（才能が羨ましい……オレってば1ヶ月かかったのに）」

（腐るなアシユラ、お前の場合ワシのチャクラが邪魔をしていたからな、仕方ない部分もある）

（わかってるけどさ、やっぱ悔しいってばよ）

（だが諦めなかっただろ、マダオの術式が壊れワシのチャクラがダダ漏れだった時だ、あの修行があったからこそ、ここまでチャクラコントロールを身に付けることができたし、尾獣玉を模倣した螺旋丸をモノにできたのだ誇れ）

（ああ、そうだな）

そして翌日の昼、湯の国へと到達した。この国で過去アシユラがあつたあの男女と再会することになる

水面歩行の行と敗北だつてばよ．．．．．

水面歩行をやらされた．．．．．面倒だなおい

『そう腐るなアシユラ』

(いやだつてさ、あの糞上忍完全に俺を試してるんだつてばよ?)

『だからこそだ、見ろ。今もこつちを見て観察してやがるぞ』

「そろそろ出発したいんだがいいか？」

「良いつてばよ」

溜息混じりに答えると、「不満か？」と聞いてきた。「当たり前だ」と返すと興味が失せたのか、サスケ、サクラに発破をかけ出発する。

もう木ノ葉を出て2週間だ、ペースが遅いせいでまだ湯の国に着かない。が、わずかに硫黄の臭いがするからもう少しつて所まで来ている。

正直なところ術式の開発が捗らない、足で風圧拳を出すことに成功はしたけど、問題点．．．．．脚部シールドが無いとやっぱり足が保たない．．．．．。しかし、そんな素材はない．．．．．ならば風圧拳そのものを足に纏うしかない。

形態変化のチャクラに性質変化を乗せるのはまだ簡単だ、だが性質変化の術をさらに形態変化させ、それを広範囲に維持するとなれば話は変わる。それがチャクラを集めにくい足の裏なら尚更だ。

「はあ」

『諦めるのか?』

(んなわけねえつてばよ、諦めないド根性だつてばよ!)

『ド根性忍伝か、マダオの師匠が書いた小説だったな』

(おう、一度会ってみたってばよ!)

そんな自分の世界に入り浸っているアシユラを横目にカカシは他の2人に問いかけた

「そうそう2人とも水面歩行はどうなのよ?」

「歩けるようにはなった」

「私は何とか飛び跳ねられるくらい」

「順調に進歩してるようで何より、じゃあ次は滝登りでもしてもらお

うか。それをクリアしたら、この修行は修了だ」

滝ねえ……と考えたアシユラは再び術式について考え出した

一つの流れから様々な水滴が連なり滝となるが……いっそのこと最初から全ヶ所から出してみるかと試してみると、足がバラバラになりそうになった

何事かとカカシ達に見られたが、九喇麻のチャクラで一気に治癒し追いかけてようとすると、反対の川辺にどこかで見た眉なしとガールがいた……

こつちを見て笑いやがったムカついた、腹が立ったので風圧拳を投げてやった、水が思いつきりかかったようでニヤついていると

「いい度胸だな……赤毛！」

「はっ、人がこけたの見て笑うお前が悪いんだってばよ！」

「てばよ？もしかして君ナ『アシユラと呼んでやれ』、アシユラ君ですか？」

九喇麻ナイスアシストだってばよ！

「おう！久しぶりだな白の姉ちゃん！」

「どっかで見たことがあるなど思ってたら……ククク、そうかてめえか！あの時はよくもやってくれたな！」

「何の事だ、額に肉のことかってば？」

「ぶっ殺す！」

「ちよつと再不斬さん！」

のらりくらりと攻撃をかわすアシユラ、再不斬は頭に血が上り冷静さを失っているかのように見えた

「先生！アシユラが！」

「あいつは霧の抜け忍再不斬！いや、しかしヤツは死んだはずでは!？」

（あの野郎、ヘラヘラ笑いながらほ紙一重でかわしてやがる！）

「まあいい、サクラ！サスケ！アシユラの戦いをよく見ておけ」

攻撃を繰り返す再不斬は、アシユラの回避パターンを分析していた、戦いの中で相手の動きを見切るのは昔からやっていたが、あの時から動きのパターンを見て回避できない攻撃で倒す事をやってきた。

が、それすらも見切りかわしていくアシユラだった

(やっべえつてばよ、眉なしすげえ強くなってる、反撃できねえ。あの時は父ちゃんに手も足も出なかったのに、今は父ちゃんくらいの攻撃速度だ。父ちゃんの本気ほどじゃないけど……)

『下だアシユラ!』

クソっ!と毒づきながら九喇嘛のアシストで何とかかわし続けるアシユラからは、先程までの余裕の表情が消えていた

「ちっ、やっぱアシストしてやがるなああのヤロウ!白!」

「はあ仕方ありませんね……アシユラ君、強くなってるのは再不斬さんだけじゃありませんよ」

氷遁を使い川を氷らせ、表面を少しだけ水の状態で残した。

この状態で残すと言うことは……

「うわっ」と

そう滑るのだ。慌ててチャクラで吸着させるが、白の精密な氷遁にうまく吸着できない。氷に吸着させても表面の温度が高くすぐに水になり、氷に吸着させれば氷遁をコントロールし氷に変換させバランスを崩させる。川の外側に逃げようにも氷の結界に覆われ脱出できない。普通に立てば滑るだけ……少しでも気を抜けば再不斬の刀と白の氷の針的になる。

そして他に足場は……無い

「せ、先生!あれ!」

「ちっ、あいつはどこで恨みを買ってきたんだ!」

「ウスラトンカチが!やるぞカカシ!」

「火遁!業火球の術!!」

「……まだよ……」

「行け!サクラ!!」

「しゃああんなるおおお!」

「サクラ!コントロールが甘い!!もっと一点に集中しろ!サスケ!業火球に集中しろ!」

「くそ!もう一度だ!」

火遁で溶かし、サクラの桜花掌で一撃を入れるも氷の結界はビクともしなかったように見えたが……

「やりますね……、もう少し強ければ危なかった」

結界にダメージはあったようだ

「これで終わりだ！小僧おとおお!!」

「ぐうっ！」

「決まりましたね、では結界を解きましょう……」

結界が解け、七班が見たモノは傷だらけのアシユラと、息を切らせた再不斬の姿だった

「霧の抜け忍再不斬……」

「……、そいつはもう死んだぜカカシさんよお」

「なぜここまで痛めつけた……」

「さてな……行くぞ」

「はい再不斬さん」

そう言い去っていった、残された七班は

「アシユラ！おい、しつかりしろ！」

「カカシ、温泉街はどの辺だ！」

「後少しだ、アシユラは俺が背負う、全速力で付いて来い！」

アシユラを背負い、全速力で駆けるカカシ、それを追う二人

そしてそれを見送る再不斬と白は

「あいつの親もスパルタだな、殺さないように痛めつけたが、まあ普通なら全治三ヶ月と言ったところか」

「それにしても驚きました、風遁で足場を作るなんて」

「ああアレの開発途中にできた副産物なんだろうよ、おかげで動きが分からなくなったが、実戦経験が足りなさすぎたな」

「ええ、ですがこれで……」

「ああ。しかし面倒な依頼だ、実戦経験をアイツを含め3人に付けろなどとな」